

# ユートピア

## 三歳児のかわいいことば



村石京子

三歳児の生活は、人数も少人数で教師との関係も密接であることから、ひとりひとりの興味や話題が教師に向かつて投げかけられることが比較的多い。いつもなにげなく聞いてそれにうけ答えしてしまうことが多いが、あんまりかわいいのでそれを記録しておいた中から幾つかひろってみることにする。

三歳児はまだたどたどしくはあるけれど、一応自分たちの生活の中で、自分の使うことばをもって自分の意志や興味を相手に伝えるという機能が果たせる段階に成長して、幼稚園に臨んでいる。そして彼らのことばの中には、三歳児らしい独特の解釈もあつたり、あるいは親からいわれたことそのままの伝達もあつたり、随分古めかしいことばも時折聞かれたり、またそれとは逆に世の中で最近使われだしているもの

がはいってきたりしている。ちょっととした話題の中にも、世相の反映ともいえるようなものもみられるし、あるいは親の生活態度の現われ「親は子ども鏡」ということもみられたりする場合もあつておもしろい。

### ◆鳥のなまえ

保育室の中に初めて鳥かごをもってきた日のこと

Y夫「これ、どうしたの?」

T「あのね、きょうからおへやに遊びにきたのよ」

Y夫「なんて名前?」

T「これは、きんかちようよ。でも、何かいい名前を考えてつけてあげてね」

ここで私は、ピー子とかチュン子とかいう月並なことばがかえってくると

予想していたのだが……。

Y夫「それじゃ、カラスにしようよ。」

カラスノ」

T「?ノ」

その会話を聞いていたN夫、ちよ

ど庭でにわとりがないたのを聞いて、

ハッと気づいたらしく、

N夫「あのね、にわとりがいい、ニ

ワトリノ」

T「??」

N夫とY夫は、それぞれ鳥かごの中

のきんかちよう向かって

Y夫「カラス、カラス」

N夫「ニワトリノ」

#### ◆オヤフコウ

I夫の指にささくれができている。

それを私に見せながら、

I夫「ねえ、先生、これしたいのよ。」

何だか」

T「あら、どうしたのかしらね」

I夫「あのね、これはね、オヤフコ

ウなのよ」

T「え、どういうこと?」

びっくりして聞く私に、N夫はすま

して答えた。

I夫「あのね、オヤフコウってご飯

を食べないっていうことよ」

I夫は、幼稚園のおべんとうのとき

も途中で席をたって遊び出し、終わり

まで食事をすませることが少なかった。

家でも同様なのであろう。そのことを

気にしている母親（あるいは祖母?）

の口から出たことばをうけついで説明

してくれたものと解釈される。

#### ◆現代語 二つ

① ある日、帰りの時間をまちがえ

たのかA子の母が迎えにくるのが大へ

んおそく三十分も待っていた。しんと

してしまった幼稚園、心細げなA子の表

情を見て私はなぐさめ顔でいった。

T「どうしたのかしら、A子ちゃ

んのママおそいわね」

A子「Aちゃんのママ、おそいわね」

T「あのね、きつと今いそいでお

迎えに来てくださるところよ。

だから、もうちょっと待ってて

ね」

A子「Aちゃんのママ、今きつとあ

せつてるよ」

② いつもは比較のおとなしいM子

が、きょうは気にいった遊びが見つ

られて、へやの中でうれしそうに大き

な声を出して元気に遊んでいる。その

ようすを見ていたらしく、K子が突然

私に向かって言った。

K子「ねえ、先生、M子ちゃんのお

てる——」

◆ママのいったこと

昼食の時間に、家の兄弟のことが話題になる。もっぱら、強いとか、何ができるとかいった話題の中で、

U子「私のお兄ちゃんね、前はとってもやさしくって何でもしてく

れたんだけど、このごろあんまりしてくれないの。だんだん、

悪くなるんだって、おかしいで

しょ、先生」

おかあさま、あんまりほかの兄弟のいるところで批評しない方がよいでしょうね。

◆製作の中に見られる一つの着線

H夫が新聞をつくって、ままごの家にとどけるといふ。画用紙にマジックで何か×とか○とかいっばい書いて、ところどころに写真と称して絵もかき入れた。その紙を四つ折にして新

聞ができ上がった。

H夫「新聞できたよ、先生」

T「見せて」

H夫「ハイ、これ」

T「あら、すてき。いいのができたわね」

H夫「新聞できたよ。(ままごごとをしている人たちに向かって)今もっていきますからね」と立ちかけて、

H夫「あつ、あれ、あれ、あれ入れなくちゃ。ほら、買物の何円ですって書いてあるのをつくるのわすれちゃた。先生、色の紙かしてね、あれ書くね。あの、卵いくらです。トマトいくらですっていうのつくるから……」

彼にとって新聞を届けるときには、別刷の商店の広告も折り込んでなければ、新聞としては不完全なものだった

らしい。

◆幼児にも幼児文学者と同じ

表現が――

保育室で鈴虫を飼っている。朝、なすやきゅうりを時々とりかえているので、早く登園した子どもはそれを見ていることもある。きょうはきゅうりをあげようと思つて持ってきた。そのきゅうりをじつと見ていたS子は、

S子「あ、先生、きゅうりさん、水

ぼうそうよ」

T「あら、ほんとねー」

S子「かわいそ、きゅうりさん。お

くすりつけてあげてね」

S子は二ヵ月ほど前に水ぼうそうになった。その体験からきゅうりのぽつぽつを水ぼうそうと言ったのだが、これとまったく同じ表現が、松谷みよ子さんの「ちいさいももちゃん」の中に

